

日本の敗戦後における旧南京神社の歩み

——なぜ南京で社殿が壊されなかったのか——

李 百浩 松本康隆

LI Baihao · MATSUMOTO Yasutaka

東南大学建筑学院教授・南京工業大学建筑学院副教授

History of the old Nanjing shrine after World war II

—— Why the shrine has not been broken completely in Nanjing ——

Abstract : This paper will outline the history of the former Nanjing Shrine—parts of whose hall of worship and shrine office still remain—from the perspective of the architectural history of Nanjing City, and discuss reasons why parts of the shrine have been preserved.

Before the shrine was erected, Mount Wutai, or Qingliang Shan, was an educational district where construction of a stadium and a conference hall was planned. In 1939, after Japan occupied the region, it was decided that a shrine be built in the area. Land was acquired for this purpose in 1941, and construction started in 1942, followed by a ceremony to summon the spirit of a deity called Chinza-sai in November 1943. The construction was completed in 1944. Gokoku Shrine was built next to Nanjing Shrine around the same time.

After Japan's surrender, Nanjing Shrine was turned into a memorial hall for heroes of national resistance, and Gokoku Shrine became a pillage exhibition center. The Mount Wutai area came to serve its original function as an educational district; consequently, the plan to build a stadium was revisited, leading to its construction after the People's Republic of China was founded. The former Nanjing Shrine came under the management of the Sport Bureau of Jiangsu Province, causing it to be used as a facility for table tennis, the bureau's senior activities and meetings. Later, the shrine faced the danger of possible demolition due to the need to collect cypress bark for paper production in 1958 and housing construction in 1985. Nevertheless, university professors called for its preservation. It is unknown until when its inner shrine remained intact and when Gokoku Shrine was torn down.

Of all of Nanjing Shrine's structures, only its hall of worship and office remain. Four reasons why they have not been destroyed are in chronological order as follows: they are of high quality in terms of structure and space; the inner shrine started to be used as a war memorial hall because shrines and such memorial halls both enshrine holy spirits; the shrine lost its original function upon the foundation of People's Republic of China but maintained its value as a usable structure; and a plan in 1985 to tear down the shrine arose from a decrease in the value of one-story structures in response to accelerated urban congestion after China's reform and opening up. Conversely, the shrine started to be viewed as a historical heritage.

1 序論

本稿に与えられた課題は、南京に拝殿と社務所が現存する旧南京神社の戦後の歴史をたどり、なぜ今日までその社殿が壊されなかったのかを明らかにすることである。また、戦前の状況に関しても不明な部分が多いため、その歴史もできる限り明らかにしたい。それによって、何が残されている／いないのか、更に戦前の歴史が、戦後へいかに影響を与えている／いないのかがより明確になると考える。

近代の神社境内は明治初めの神仏分離によって、境内から仏教施設が取り除かれたため、閑散としたものになった。そこで境内の整備、充実が図られたが、限られた国費を抑制するため、明治6年に大蔵省が教部省の案を一部取り入れて「制限図」を作成した⁽¹⁾。「制限図」の内容は、神仏習合を見せた近世期を遡って、流造本殿・入母屋造拝殿を中心とする独立社殿による構成を基調とし、大中小の社格別に厳格な仕様の差異を与えたものであった⁽²⁾。その影響は明治半ばに強く見られるようになり、流造本殿・入母屋造拝殿という建築様式、本殿規模や敷地規模、社殿構成を中心にして、特に創建神社に関して顕著であったことが明らかにされている⁽³⁾。しかし、その画一性への批判が徐々に高まり、大正4年の明治神宮竣工を境にその影響力は衰退し、その後は内務省神社局及び神祇院における技術官僚の設計思想や、地域の文脈を重視した建設活動を中心に、多様な展開が見られた⁽⁴⁾。

1943年鎮座という南京神社の建設時期は、近代の神社建設の中では末期にあたる。そして海の向こうに建てられたことから海外神社に位置づけられる。海外神社は一部を除いてほぼ全て創建神社であるが、南京という地に神社を建設するに際しては、外務省の「在中華民國神社規則」に則ることが必要であった。祭神は、海外神社協会・小笠原省三の主張に沿った、天照大神、明治天皇、國魂大神の三柱としている。更に、南米などに建てられた海外神社とは異なり、植民都市の神社としての性格を持つ。植民都市の神社については、朝鮮、台湾、満州を中心とした緻密な研究がこれまで積み重ねられてきている⁽⁵⁾。しかし、日中戦争以後の中国大陆に建設された神社については研究があまり進んでいない。

戦後の海外神社についてはその現況から、中島三千男によって「改変」、「放置」、「再建」、「復活」の四つに分類され、変容については政治、社会、経済、文化、支配交替の〈刻印〉の五つの要因が挙げられている⁽⁶⁾。南京神社はこのうち「改変」に分類されているが、その変遷や実態、変容の要因について詳細な調査研究はなされていない。

本研究が対象とする南京神社は上記のように位置づけられるが、個別的な研究は見られず、その具体的な建設状況や戦後の変遷は不明である。南京は近代以前のいくつかの王朝の首都ともなり、近代以降においても清末の地方都市、中華民國国民政府の首都、日本の侵略、南京維新政府、汪兆銘政府、再び国民政府の首都、そして中華人民共和国の地方都市という経緯を経ている。南京にはめまぐるしく変化するこれらの政治状況に大きな影響を受けながらも、南京という都市史的文脈に沿った展開があったと理解すべきであろう。本研究は南京都市建設史研究の視角から冒頭の課題に挑みたい。

2 南京神社の過去と現在

2.1. 過去

2.1.1. 南京神社計画以前

図1は南京神社が建てられる以前の五台山周辺地図である。それぞれ1910、1933、1937年のものであるが、五台山周辺の開発が進んでいるものの、五台山自体は特に開発が進んでいなかったことがわかる。

では五台山にはどのような開発計画があったのであろうか。南京の都市計画上の位置づけを確認しておきたい。中華民国が成立し、首都を南京と定めたのは1912年（民国元、大正元）であったが、実際に南京の首都建設が動き出したのは1927年（民国16、昭和2）に南京国民政府が成立してからである。そしてその後の都市開発は1929年に作成された「首都計画」を基本に進められた。⁽⁷⁾それによると、五台山の面積は約955畝（約63.67ヘクタール）と広く、建築以外にも運動場やホールなどに便利であること、城内における位置は西に偏っており幹線道路もないが、将来工業地区が開発され幹線道路がつくられると便利になること、地勢が高く容易に周囲を見渡せることから市政府の尊厳を保ち、市民の注意を引くことができること等、五台山は運動場、会議場、図書館、博物院など各種文化的な公共施設を建設する、鼓楼地区と一体的な文化教育区と設定されていた（図2）。

このような計画を前提にし、実施には様々な方法が取られたと考えられる。史料上確認できるのは、中国童子軍（ボーイスカウト）司令部による土地徴収である。「童子軍總會本部建物や運動場などを建設するために民間の土地を徴収する」との南京市土地局からの布告が1931年2月23日付で出されており、また1933年には付近で小学校の建設計画が確認できる。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

1937年12月13日の日本軍による南京占領、翌年3月に日本の傀儡政権南京維新政府が成立した後も五台山の開発方針は基本的に変わらなかったらしく、1939年6月10日に上記の中国童子軍司令部所属の土地185.8954畝及び建物全てを、上海から移転してきた正治小中学校に使用することを認めている。⁽¹⁰⁾



1910



1933



1937

図1 南京五台山周辺地図
(1910、1933、1937。出典：苏甲荣『城市记忆・老南京』学苑出版社、2012)

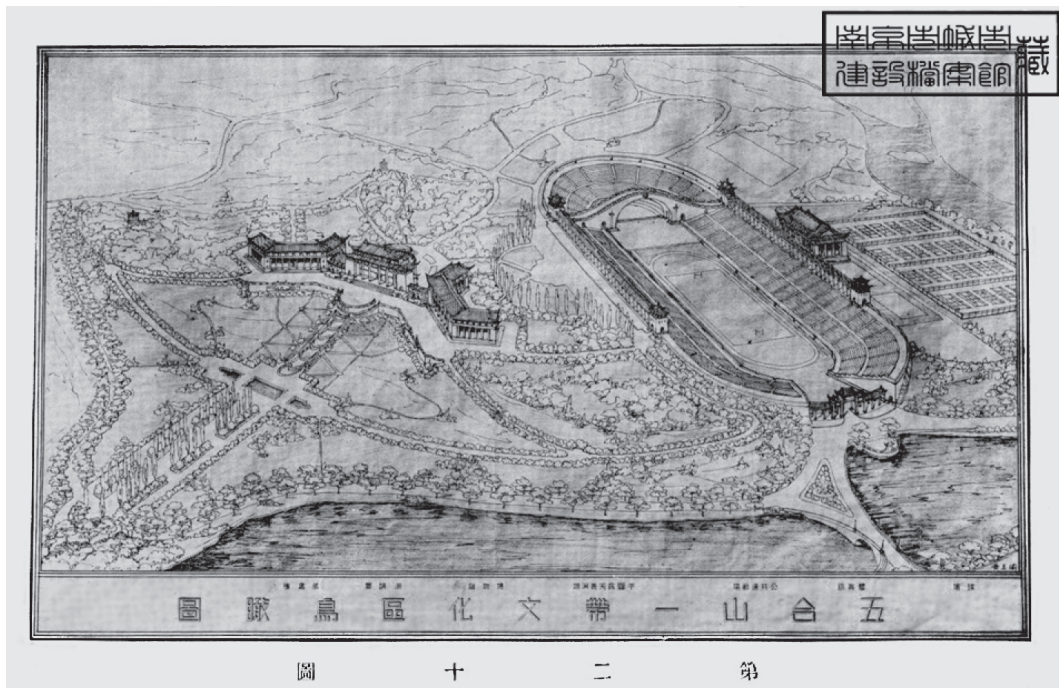


図2 五台山開発計画（『首都計画』より）

2.1.2. 計画及び建設時期

南京神社の建設計画は、南京占領以前から南京居留民長・須藤理助によって提唱されていたが、占領後に同居留民長となった前田が軍当局の支援によって具体化を急いだらしい⁽¹¹⁾。場所は五台山が選ばれ、「南京城内西北に位置する丘陵で（中略）恰も今事変中、中支那に於て忠勇の死を遂げた人々を顕彰す可く計画された忠霊顕彰記念碑も、同じくこの五台山高く建立されるので、彼此共に南京の神域としてわれ等の誇りとなる事であろう」と記されている。そして1939年5月7日南京居留民会評議員会で造営を可決、同月10日に造営奉斎会事項会則を決定、10月6日奉斎会第一回理事会を開催して造営趣意書や名誉総裁などが決められ、その趣意書によって資金の奉献をまつこととなった⁽¹²⁾。これらの動きは上記正治小中学校の使用許可が出された時期と同じであるが、その関係は不明である。

また、小笠原省三も1940年1月に南京に赴き、助言を行っ⁽¹³⁾たらしい。小笠原自身も「済南神社も蒙疆神社も南京神社も北京神社と共に、その最初から私が幾度となく現地に赴いて奉斎まで御世話申し上げた神社である⁽¹⁴⁾」と記している。

五台山への実際の建設準備としては、まず土地買収が確認できる。1942年5月付の在南京日本総領事館による「管内一般概況」によると、1941年6月に日本大使館、総領事館敷地として五台山の官有地と民有地、合計681畝（約45.40ha）を取得し、続いて同年9月に大使館敷地隣接地五台山の官有地と民有地、合計145畝（約9.67ha）を取得している。前者は価格「金四十五萬圓」、後者は「銀百六十五、八〇〇元」で、それぞれ「大使館名義」、「南京神社名義ノ永租権ヲ取得セリ」とある⁽¹⁵⁾。また、同じ外務省記録である「3. 敵産ノ調査関係／17 中支地区文化関係未処理分⁽¹⁶⁾」には、その筆頭に「米国公立学校」が挙げられ、その「現使用者」が既に南京神社と同務所になっている⁽¹⁷⁾。本史料の作成時期は不明であるが、「敵産」という記述が見られることから、1941年12月8日の英米への宣戦布告以後と考えられ、上記買収時期から3ヶ月以上後に同敷地が神社境内地に加えられた

⁽¹⁸⁾
ようだ。

土地の拡張は更に行われている。1942年7月27日に南京神社造営奉斎会長から総領事への公式書簡で、表参道を開くために土地買収と公道の変更を願い出ており、⁽¹⁹⁾1943年3月と10月には民間の地主等にそれぞれ9,776元及び1,773元の地価補償金が支払われている。⁽²⁰⁾また、神苑の樹木に関して、1942年1月中に内諾を得た上で、南京神社奉斎会長前田市治から南京園林管理处長へ、松と冬青をそれぞれ「目通一尺五寸位、高一丈五尺乃至二丈内外五十本」、「目通五寸以上 直一丈内外 三百本」との譲渡願いが同年3月11日付で出されている。⁽²¹⁾

実際の建設活動については、工事を請け負った出川組・出川茂が作成した資料からうかがうことができる。1942年8月分の中国人労働者の食米配給を求めている書類から、予定工事期間（1942年7月から翌年3月まで）、中国人労働者の120名前後の氏名と年齢等が判明する。⁽²²⁾なお、日本人職人についての資料は見当たらないが、中国人職人の作業が神社の「水作」、「小工」、「石工」、社務所の「木作」、「水作」、「小工」と記され、社務所以外の「木作」が記されていないため、本殿は日本人職人によって施工されたと考えられる。

竣工時期は不明であるが、先の「管内一般概況」に「明年秋迄」、すなわち1943年の秋には竣工したいとし、鎮座祭に参加した小笠原の記述に「南京神社の御鎮座祭は、昭和十八年十一月であった」⁽²⁴⁾とあることから、1943年11月の鎮座祭直前に主要な建物は完成したと見られるが、戦後すぐの南京市政府の調査結果に1944年竣工とあるので、鎮座祭後も境内諸施設や神苑を中心に工事が続けられていたと考えられる。なお、南京神社外苑が五台山の麓に設けられていたようであるが、詳細は不明である。⁽²⁶⁾

2.1.3. 南京神社の敷地

先の「管内一般概況」⁽²⁷⁾に記載されている概要を記すと、南京神社について、設立地は「南京特別市五臺山」、神社名は「南京神社」、祭神は「天照大神、明治天皇、國魂大神」、総坪数は29,000坪、「土地買収費、墓地改葬費、建物買収費移轉費、樹木買収費等計」約125,000円、「社殿其ノ他建築費」約372,500円、「参道整備及祭器購入等」約42,500円、「諸掛」約30,000円、「維持費」約80,000円とし、これら「設立費」の合計は650,000円である。そして、護国神社についても記述があり、設立地は「南京神社社地内」、神社名は「南京護國神社」、祭神は「支那事變ニ於ケル南京攻略戦及爾後其ノ周邊ニ於ケル戦没軍人軍屬ノ英靈」、設立費150,000円は「軍其ノ他ノ寄附ニ依ル」とし、「南京

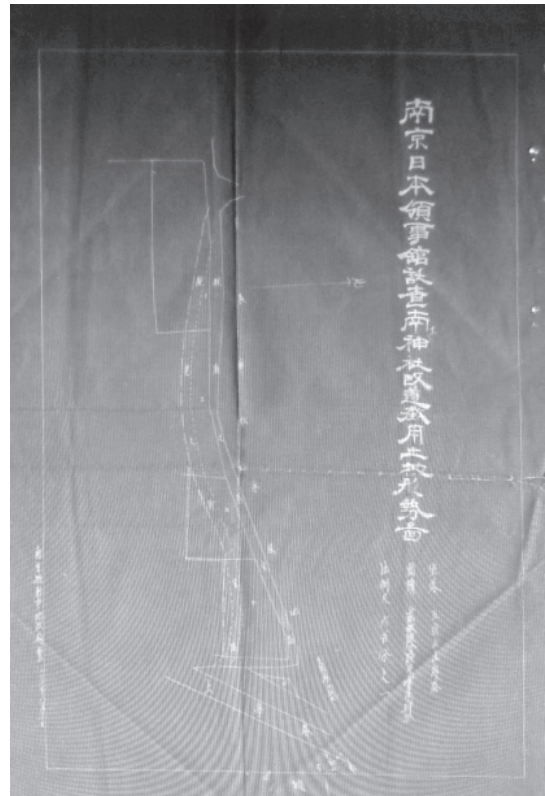


図3 南京日本領事館託查南京神社改道徵用土地形勢図
(図中右が北、1942年、南京市檔案館：10020052135 (00) 0003)

神社ト同時ニ竣工セシムル豫定ヲ以テ準備ヲ進メ居レリ」とある。これらのことから、護国神社が南京神社境内に計画していたこと、護国神社も南京神社と同時に竣工の予定で準備を進めていたことがわかる。

護国神社については、1941年10月6日付で南京の杉原総領事から豊田外務大臣にあてて建設の許可を至急求めているが、その理由は軍が南京神社社殿の右側に護国神社を造営したいという強い希望があり、それが10月17日に実施する南京神社の地鎮祭に影響するためであった。⁽²⁸⁾つまり、軍は南京神社の地鎮祭実施の直前になって、突然その隣に護国神社建設の許可を求めてきたと解釈できる。先に見たように、五台山の地は本来忠魂碑が建設される予定であったことから、軍が何らかの理由で忠魂碑ではなく、護国神社の建設に切り替えたと考えられる。なお、南京神社の資金は寄付金を一般から募集しており、4月30日現在で255,000円、建築に必要な木材600石のうち480石が到着し、残りも近く到着の見込みが立っているが、南京護国神社の資金は上にみたように、軍を中心とした寄付としている。これらのことから、護国神社の建設には軍の突然の方針変更とその強い意向が働いていたと見られる。

都市計画的な特徴として、市中心部を見下ろす山の上に位置するのは、日本の植民都市計画における神社配置と共通性が高い。南京での特徴を挙げるとすれば、市内、あるいは城郭内に設けられていることであろうか。このような敷地選定の理由の一つに南京における土地取得の難しさが挙げられる。汪兆銘政府は日本の傀儡政権とされるが、日本人の土地取得は容易でなかったらしく、先の「官内一般概況」⁽²⁹⁾の「南京ニ於ケル邦人ノ土地使用並ニ買収状況」には、規定の入手手続きを行っても「大使館並ニ神社以外ノモノハ懸案中ナリ」と記されている。大使館の土地は1941年6月に、南京神社の土地は同年9月に大使館敷地隣接地を買収しており、その敷地選定には日本の管理が行いやすい、大使館と隣接する場所を選んだ可能性がある。また、五台山に隣接する清涼山には当時日本軍の小型火葬場があったという。ここで死体を焼き、遺骨を神社に暫時安置するのに便利であったという指摘もある。⁽³⁰⁾

2.1.4. 南京神社の建築

建築については設計者として高見一郎という名が知られているが詳細は不明である。⁽³¹⁾しかし、最近日本国内で設計図が確認された。⁽³²⁾南京神社のものは「第参號 南京神社々殿新築設計姿図」、「第六號 南京神社軒裏及兒屋伏図」、「第拾四號 南京神社拝殿兒屋詳細図」の3枚、護国神社のものは「護國神社新築設計平面図」、「第四拾七号 南京護國神社 拝殿兒屋梁行並ニ幣殿桁行詳細図」、「第七十一号 南京護國神社御本殿兒屋組断面詳細図」の3枚計6枚である（以後上記の順に設計図1、同2、同3、同4、同5、同6とする）。これらの設計図のうち描かれた日付の記入が確認できるのは設計図1、3、5、6の四つで、それぞれ「昭和十六年一〇月一五日」、「昭和十七年八月調製」、「昭和十八年二月調製」、「昭和十八年十一月調整」とある。先に見た土地買収の時期は1941年の9月であるが、同年10月には既に南京神社本殿の基本設計は完成していたことがわかる。護国神社については本殿小屋組詳細図が1943年11月であることから、同月の地鎮祭に工事が間に合ったかどうか定かでない。

提供を受けた図面データの解像度が低いため、詳細については不明な部分が多いが、建築様式は以下のようなものである。南京神社は入母屋造の拝殿と流造の本殿の間に幣殿を設けて一体的な建物とした複

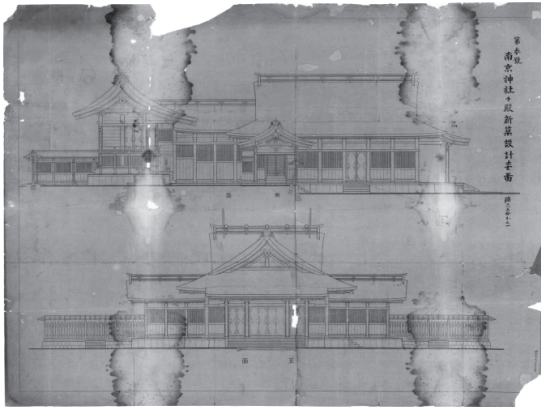


図4 第参號 南京神社々殿新築設計姿図
(1941年10月15日付)



写真1 南京神社拝殿、鳥居、灯籠
[1943～45年頃、出典：「南京清凉山花岗岩石柱或为原日本神社牌坊遗存」『现代快报』2014.7.14 (<http://js.people.com.cn/culture/n/2014/0714/c360308-21661254.html>)]

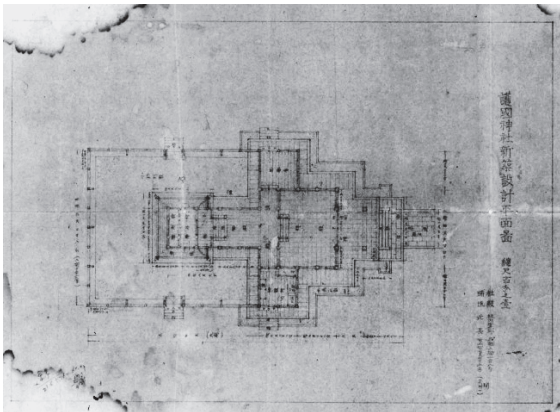


図5 護国神社新築設計平面図
(作成時期不明)

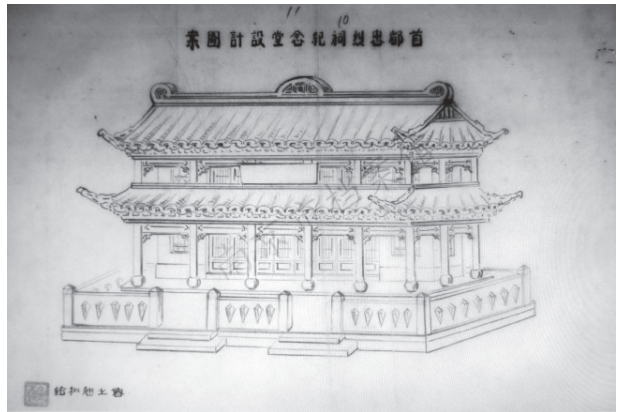


図6 首都忠烈祠紀念堂設計図案 (1946年、南京市檔案館：
10030030242 (00) 0002)

合建築で、装飾は簡素である。拝殿の両翼からそのまま丁度両翼と同じくらいの幅で檜垣を伸ばし、そこから後方に折り曲げ本殿裏まで囲っている。護国神社も入母屋造拝殿と流造本殿の間に幣殿を収めた複合建築であるが、檜垣は両翼から左右に伸びず直接後方に伸びている。なお本殿はともに千木と鯉木を載せている。南京神社については竣工直後と考えられる写真（写真1）が知られているが、この設計図とよく対応していることがわかる。

2.1.5. 戦後

2.1.5.1. 中華民国時期

戦後すぐ9月20日付の資料に、まずは神社境内を南京市の管理下に収め先烈遺物陳列館と市立図書館⁽³³⁾として使用する方針が見られる。そこには、「南京護国等神社占用地皮達数十畝之多、景物優美」と記されているが、その面積が10畝（約0.67ha）であることから南京神社と南京護国神社を含めて「南京護国神社」とし、神苑や境内の社務所付近を含まず両本殿周辺部分のみ計算していると考えられる。また、「優美」と表現されていることが注目される。美的価値を特に強調したものではないと考えられるが、その後の再利用を意識した表現であるといえよう。

具体的な改造に関しては、以下のような案が出されている。

一、依忠烈祠设立及保管办法第九条规定会同内政部办理保管之

訳：忠烈祠の設立と保管方法の規定第九条によって、内政部と共同で忠烈祠を管理すること。

二、将原有正面两殿房屋移建右侧空场中改作图书馆之用并将屋上东洋式附件消除

訳：元々正面にある両殿を右の空き地に移動し、図書館として使う。その際、屋根の東洋式付属物を削除する。

三、移动原有正面两殿后就原有基地建造新式忠烈祠纪念堂（设计图案附后）

訳：元々正面にある両殿を右の空き地に移動してから、両殿があった所に新しい忠烈祠記念堂を作る。（設計図案添付）

四、日本式纪念坊纪念碑路灯拟改变方式加增忠烈纪念字样以壮观瞻

訳：壮観に見えるように、日本式の記念坊（鳥居）、記念碑、燈籠を改変し、忠烈記念という字を加える。

五、将原有行道树（日本櫻花）移植别□改植国花（腊梅）和松树用间栽法

訳：本来の並木（日本の桜）を他の場所に移植し、国花（臘梅）と松を交互に植える。

六、忠烈祠内图书馆陈列书籍应征集我国历代民族英雄传史种种书册公开阅览

訳：忠烈祠における図書館の書籍であるため、歴代の民族的英雄の伝記を収集し、一般の閲覧に供す。

上記計画では、南京神社、護国神社を東側の空き地に移築し、図書館の建物として利用すること、建築や構造物については「東洋式」、「日本式」といった要素を取り除くこと、移築後の場所には中国らしい意匠の忠烈祠記念堂を新たに設計していることなどが確認できる。このような計画がどの程度実現したのかは不明であるが、1946年9月1日から戦勝記念として戦利品陳列館を開放し、一般の参観に供している。その時の様子を写したと考えられるものが残されている。写真2、3、4がそれぞれあるが、これらから南京神社の建物がほぼそのまま用いられていること、鳥居が中華風に装飾されていることなどが確認できる。また、写真2、3からは南京神社、護国神社それぞれの拝殿の奥に本殿屋根の一部が確認でき、写真4には本殿の一部が写っている。また、南京神社が「中国抗戦陣亡将士記念堂」に改造されたことから、写真5の「戦利品陳列館」は護国神社の改造と見られる。そして、そうであるなら、護国神社前方にも鳥居があったことになる。

戦勝記念が一段落すると、同年11月には体育場の建設が建議⁽³⁴⁾され、測量調査、地産権調査等を経て、南京市と童子軍が協力して実施することとなった⁽³⁵⁾。これらから、土地の所有並びに建設計画は、基本的に日本軍占領以前の状態に戻っていることがわかるが、この時に作成された図面の一つが南京神社の建物配置の様子を伝える貴重な史料である。図7がそれで、その時に作成された測量調査図と見られるものの南京神社部分である。図は上が北であるが、境内は大きく南北二つのエリアに分けられる。南のエリアは横長の長方形で中央南端に入口があり、そこから北エリアまで直線の道が延び、北エリア入口手前左手に手水舎がある。そして南エリア南東隅には社務所と見られる建物「洋房」がある。北のエリアは北東隅を欠いているものの正方形に近い。この北エリアは更に東西二つのエリアに分かれ、西側が大きく、東側はやや小さい。建物は東西それぞれに「洋房」があり、大きい西側が旧南京神社、やや小振りの東側が旧護国神社と考えられる。社務所の設計図はまだ知られていない



写真2 旧南京神社拝殿、鳥居（1946年）

〔出典：芮天舒「五台山，“神社”探秘」『周末报』2015.10.15
http://zm.njnews.cn/html/2015-10/15/content_643.htm〕



写真3 旧護国神社拝殿（1946年）

〔出典：友声旅行団『复兴后的首都』全国图书馆文献缩微中心、2011〕

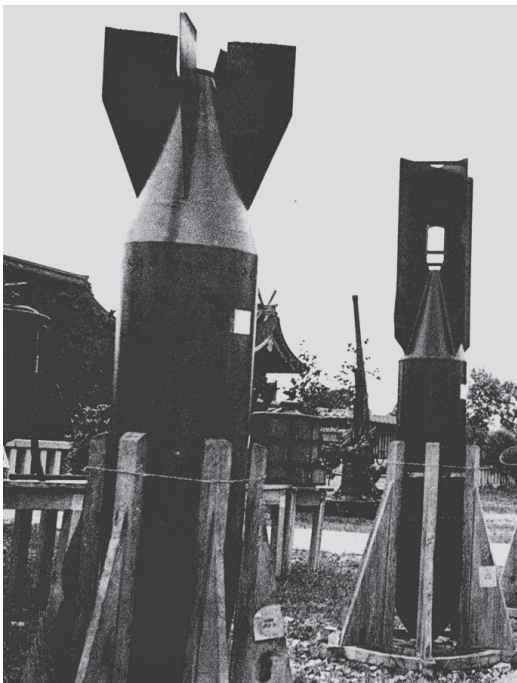


写真4 旧南京神社拝殿（左）及び本殿（中央）

〔出典：秦凤『秦凤图文笔记』山东画报出版社、2008〕

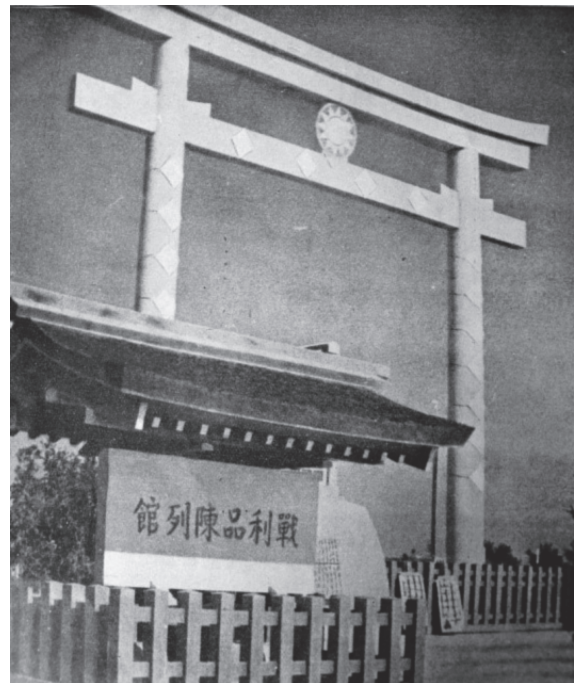


写真5 戦利品陳列館に掛替えられた表示と改造された鳥居

〔所蔵：南京市檔案館〕



図7 1947年測量図（南京市檔案館：10030070323（00）0020）

が、南京神社と護国神社に関しては先に見た設計図と一致するといえる。

なお、この時の調査報告によると、1941 年 4 月に南京神社建設の勘文、公告があり、7 月に当地にあった墓を（移設のために）掘り、11 月に土地家屋を徴収し（1937 年に決められた土地値段を使用）、以後立ち入り禁止となったらしい。神社建設期間は 1942 年春起工、1944 年竣工とされ、先の出川組作成書類、総領事館報告と大きな矛盾はない。

2. 1. 5. 2. 中華人民共和国時期

五台山地区は上記に見たように、再び首都計画上の文教地区と同様の位置づけに戻された。しかしそれが実施に移されるのは、国共内戦が終結し、共産党政権が成立した後であった。そしてそれに伴い、南京神社が建てられていた場所も江蘇省体育局の使用するところとなった。

2012 年の近隣住民への聞き取りによると、現存する二つの建物（すなわち旧南京神社及び旧社務所）はそれぞれ「大廟」、「小廟」と呼ばれており、「大廟」はまず卓球選手の訓練場となり、その後体育局老幹部活動センターとなった。「小廟」はまず体育局の会議室として使用され、その後南京で開催された 2005 年の第十回全国運動会の際はボランティアの研修センターとなった。更に 2012 年 2 月に「大廟」が江蘇省建工集団第七建築会社に貸し出され、そのオフィスとなったが、それに伴って老幹部活動センターは「小廟」に移転したらしい。⁽³⁶⁾ なお五台山の麓、上海路に面して一の鳥居があったが 1990 年の五台山地区道路拡張に伴い、取り壊されたらしい。⁽³⁷⁾

また、建物の改変については、1958 年に屋根の檜皮が紙の原料として取られ、代わりにセメント瓦が葺かれたこと、1985 年に体育委員会が住居用団地を建てようとした時、二棟の神社遺構は取り壊されようとしたが、南京工学院（現：東南大学）建築系教授・童寯が奔走し、保存されることになった。⁽³⁸⁾ そして 1992 年に南京市級文物保護単位となったらしい。

文物保護単位であることを示す石碑は旧南京神社建築に二つ、旧社務所建築に二つあり、旧南京神社のものは「南京市文物保护单位 五台山一號建築 南京市人民政府 一九九二年三月公布 南京市人民政府 立」、「南京重要近现代建筑 编号：2010002 五台山 1 号建筑-1 该处两幢建筑原为日本神社，建于 1939 年，砖木结构，柱附式台基，方形外廊柱，歇山顶，是南京城内仅存的一处抗战时期的日式和风建筑。南京市人民政府 二〇一〇年九月」とあり、旧社務所のものは「南京重要近现代建筑 编号：2010002 五台山 1 号建筑-2」として上記「五台山 1 号建筑-1」と以下同文、「江苏省文物保护单位 日本神社旧址 江苏省人民政府 二〇一一年十二月公布 南京市人民政府立」とある。これらの石碑から、1992 年に南京市文物保護単位となった後、2011 年に江蘇省文物保護単位に格上げされたことが確認できる。

以上のことから、中華人民共和国時期の旧南京神社は、1958 年にはじまる大躍進時期に紙の原料調達のため屋根の檜皮が剥がされ、代わりにセメント瓦が葺かれることになった。そして、改革開放後の経済発展が進む 1985 年に、建築資産としての利用価値が低くなり、建て替えられようとした。そこで建築学を専門とする大学教授により歴史的建築遺産という価値が新たに付されたといえる。そして、その価値は市級から省級へと近年高まってきているといえるかも知れない。

2.2. 現在

2.2.1. 現状 実測図

では、現状を見ていきたい。図8～10が旧南京神社の実測図で、それぞれ南立面図、西立面図、平面図、写真6は旧南京神社上空から撮影したものである。平面図を見ると、南側（図中右側）が木造、北側がコンクリート造であることがわかる。このことから、南京神社の遺構として残存している建築は木造の拝殿部分のみと見られる。コンクリート構造部分は、本来の幣殿と本殿の位置に相当する。西立面図からも南側（右）と北側（左）の違いが明らかで、拝殿の棟高に合わせて新たな建物が接続されていることがわかる。写真6からは、旧拝殿部分の屋根は増築部分と同様のセメント瓦に葺き替えられていることがわかるが、拝殿部分の屋根構造に大きな変化はなく、破風の懸魚や軒下の二

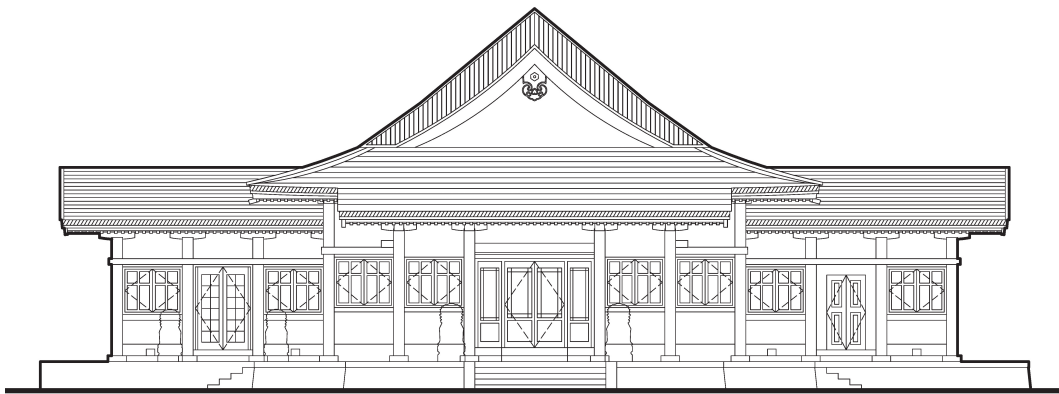


図8 旧南京神社拝殿南立面図

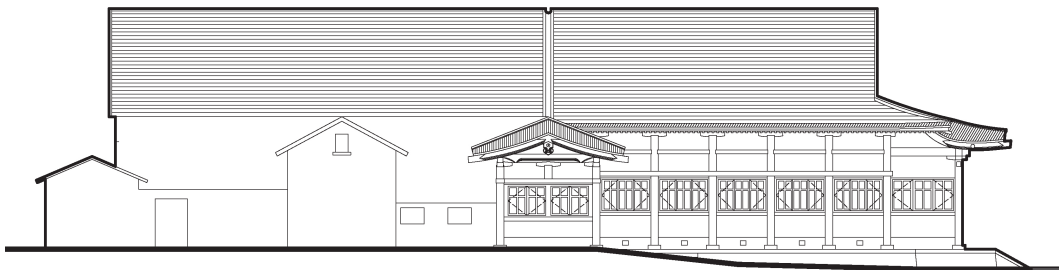


図9 旧南京神社西立面図

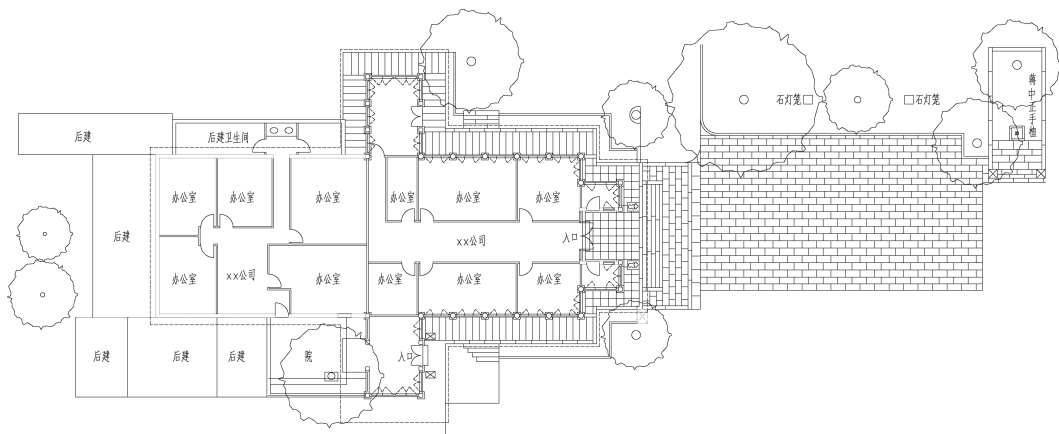


図10 旧南京神社平面図（図左が北）

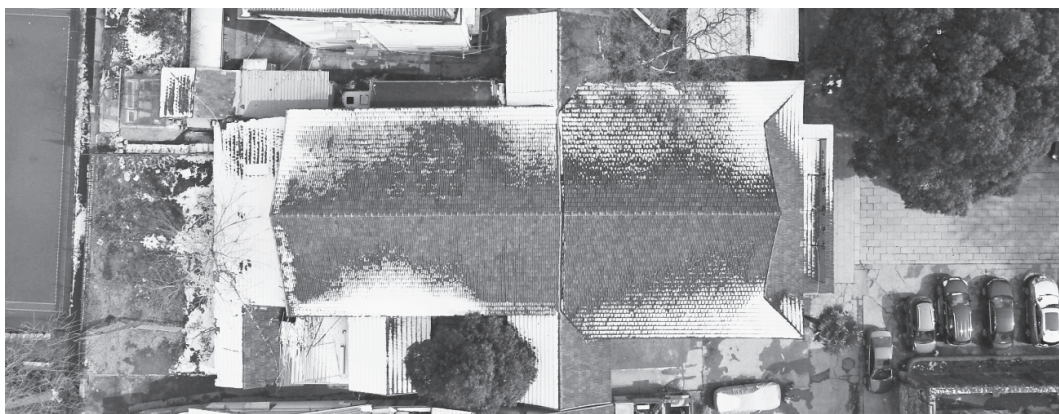


写真6 旧南京神社空撮写真

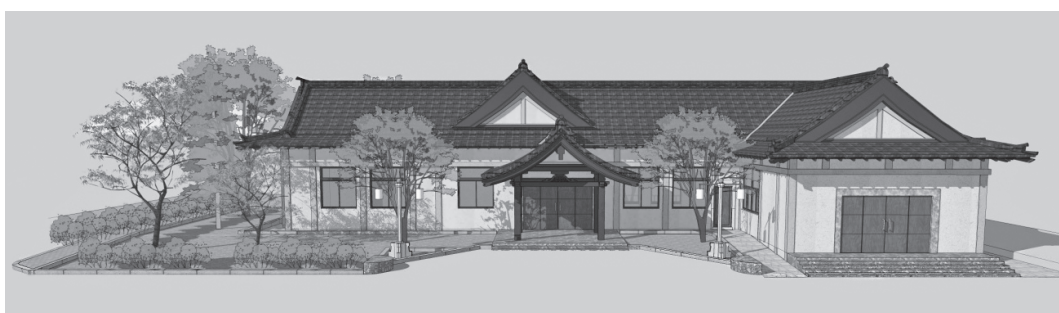


図11 旧社務所西正面外観透视图

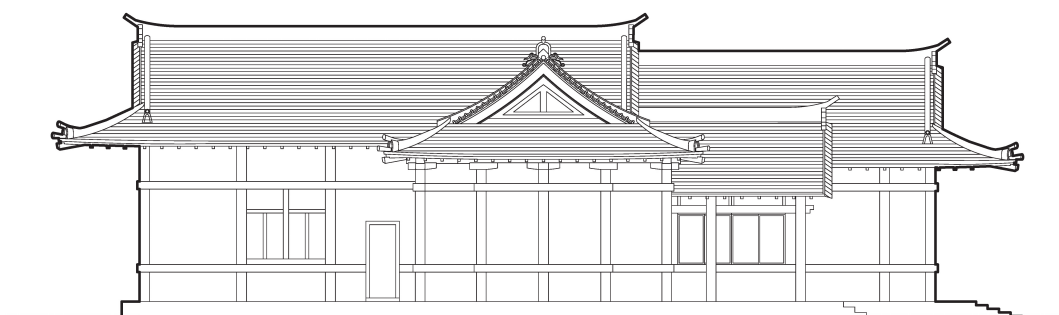


図12 旧社務所北立面図



写真7 旧社務所破風



写真8 旧社務所隅軒裏

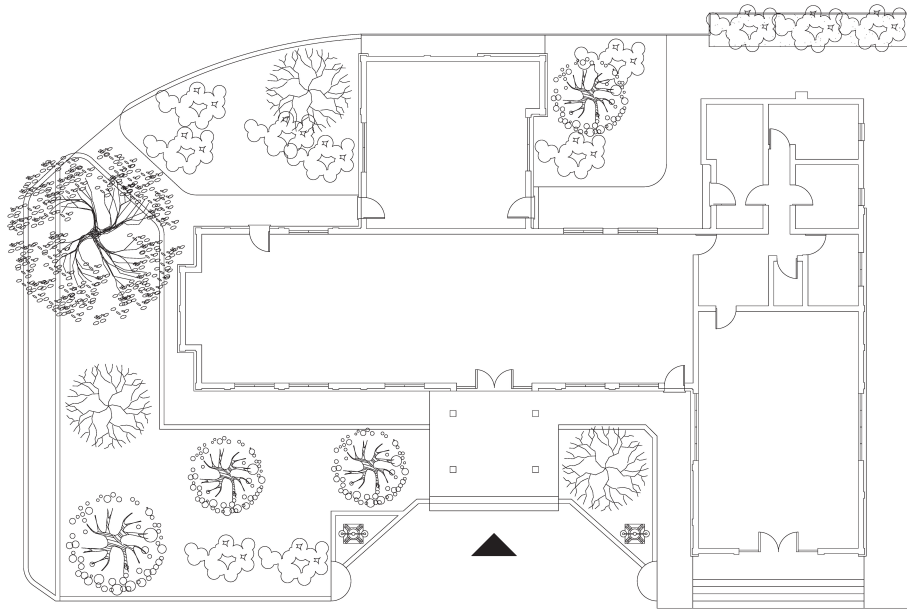


図 13 旧社務所平面図（図左が北）

重垂木、更には柱、長押、貫、舟肘木をはじめ、床下換気口まで、当初の様子をよく伝えている。

南京神社は靖国神社を手本にしたともいわれ、確かに拝殿正面に大きく見せた破風と左右両翼の意匠に共通性が見られる。しかし、建築形式としては平入と妻入の大きな違いがあり、また靖国神社は前方に唐破風が付いて破風が二重になっていること、両翼の回廊が拝殿と独立していることなど相違点も多々見られる。

図 11～13 は旧社務所の実測図で、それぞれ西正面外観透視図、北立面図、平面図である。写真 7、8 は屋根破風及び軒裏部分である。平面図からは全てコンクリート造であることがわかる。内部は改造が激しいため、本来の間取りは不明であるが、正面の車寄から入った横長の大きなエリアを中心にし、東に一つ、南に二つのエリアが見て取れる。内部と異なって外観は社務所当時の様子をよく伝えている。図 12 からは柱、長押、舟肘木などがコンクリートで形作られ、コンクリート構造は当初からのものであったことがわかる。但し、その上に載る桁と上部の小屋組は木造と見られる。写真 7、8 からわかるように、瓦も日本独特の棧瓦で、鬼板に十六菊菱の意匠が施されており、破風板や懸魚もよく遺っている。ただ、図 11 で見られる正面右手前に突き出た入口部分は改造が激しく、その前方の低い階段も後補と見られ、当初の状態は不明である。

2.2.2. 南京神社境内の復原

全体的に復原してみると、まず五台山東側麓の上海路に面して一の鳥居があった。そして参道を通って境内入口に二の鳥居があったと思われるが、それを示す史料はない。境内に入ると正面奥に南京神社、右手前に社務所、右奥に護国神社があり、南京神社の前に鳥居があった。また、護国神社の前にも鳥居があった可能性がある。

他に、主要な導線には石畳が敷かれており、南京神社の鳥居をくぐる手前には石灯籠が、更にその手前左脇には手水舎が設置されていた。また、南京神社、護国神社それぞれの本殿を囲う透塀、両神社本拝殿のある北エリアと社務所のある南エリアを区画する玉垣、更に北エリア内の東西を分ける玉

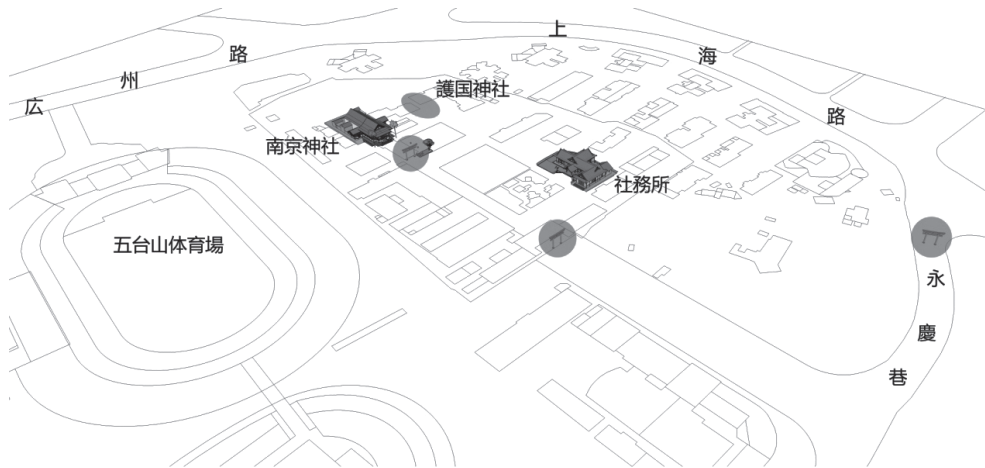


図 14 現状俯瞰図（灰色の円及び楕円で示した鳥居及び護国神社は復元）



写真 9 左：蒋介石手植碑、中央上：灯籠傘部分、中央下：蒋介石手植碑台座部分、右：南京神社入口脇の獅子

垣があったと考えられる。更には、神庫、祭器庫などの存在が想定されるが不明である。

そして上記のうち現存するのは、旧南京神社拝殿、社務所、若干の石畳、石灯籠の竿部分に限られる。また、蒋介石手植えの黒松を記念する碑が旧南京神社拝殿前方に建てられているが、植えられた黒松を「揭幕樹」といい、神社を「中国抗戦陣亡将士記念堂」に改造した際に設置されたものであるらしい。その碑石は玉垣を利用したもの、その基石は灯籠の基礎部分であった可能性がある。なお、現在旧南京神社拝殿正面及び左奥の入口両脇にある獅子四体は、近年ここを借りた建設会社が設置したものであるらしい。また、内部は確認できなかったが、地下へ降りる階段の入口が南京神社と護国神社の境界前方付近に現存する。



写真 10 地下入口

3 結論

以上、旧南京神社の歩みがおおよそ明らかとなった。南京神社が建設される以前、その地五台山は都市計画上で体育場、会議場などの建設が予定された文教地区であった。日本の占領後も当初は変化がないように見えたが、1939年から南京神社の建設予定地となり、1941年に土地買収がなされ、1942年の春に起工、1943年の11月に鎮座祭を行った。鎮座祭後も工事は継続し、全てが竣工したのは1944年に入ってからであった。

日本の降伏後は南京神社の場所に「首都忠烈祠記念堂」と市立図書館の計画がなされたが、実際には南京神社が「中国抗戦陣亡将士記念堂」、護国神社が「戦利品陳列館」になったようである。一方で、この五台山エリアは日本軍占領以前の文教地区に戻され、体育場の建設計画が再び持ち上がった。中華人民共和国建国後もその方針に変化はなく、実際に体育場が建設された。そしてその建設に伴って旧南京神社も江蘇省体育局の管理するところとなり、卓球場、体育局老幹部活動センター、会議室などに利用された。建物の大きな改変としては、1958年における檜皮の採取、1985年の建て替え危機が判明した。しかし、いつまで南京神社本殿が遺っていたのか、護国神社がいつ取り壊されたのかは不明である。

以上のことから、現在南京神社跡地は、南京神社が建てられる以前の文教地区状態に戻ったといえる。しかし、本殿という中枢建築は排除されたものの、旧南京神社拝殿と旧社務所は現在も残されている。起点を南京神社の建設からとして見ると、確かに中島が述べる「改変」と言える。しかし、都市計画上の位置づけでは南京神社建設以前のものに戻されたことから「回復」とでもいえようか。では、その「改変」あるいは「回復」の歩みの中で旧拝殿及び旧社務所はなぜ壊されなかったのであろうか。

まずは終戦直後に記された「景物優美」という表現から、質的、構造的、空間的に質の高い建築であったことが前提としてあろう。次に、旧本殿も残されたまま「中国抗戦陣亡将士記念堂」となっていることから、神社の英霊を祭るという空間に求められる機能的類似性が高かったことが指摘される。ただしそれには、「東洋式」、「日本式」とされるものはできるだけそぎ落とされる必要があった。

中華人民共和国が成立すると、国民党の「中国抗戦陣亡将士記念堂」は廃され、文教地区における体育施設の専一化が進んだ。つまり神社から廟への機能的、文化的連続性は絶たれ、利用可能な建築資産としての価値にのみ注目されたといえる。1958年に檜皮が剥ぎ取られたのも、物理的な資産としての位置づけをよく示していよう。卓球場として必要な空間は、コンクリートの大きな空間であったと見られる。そして、1985年に住宅地建設のために取り壊されそうになったのは、改革開放後に加速する都市の過密化が平家建築の資産的価値を下げたからといえよう。そこで新たに与えられた価値が、建築の歴史遺産としての価値であった。

中国の都市、建築保存に関して、歴史文化名城制度が知られるが、その開始は1982年である。南京も第一批で指定されており、その影響が指摘できる。旧南京神社が保護単位として直接的に指定されるのは1992年であるが、この10年間に文化概念の変容が進み、南京神社が中国の歴史の一部になったと捉えることができる。現在旧南京神社は戦争の歴史を伝える証であり、当時の首都で現在も中国有数の重要な都市である南京にあり、南京市内における都市計画史上重要な位置にあることは、そ

の意義を深めているといえよう。

現在付近の住民は旧南京神社拝殿を「大廟」、旧社務所を「小廟」と呼んでいる。本来は護国神社が「小廟」と呼ばれていたと考えられるが、その土地の人間からも原型が既に忘れられているようである。当地は体育局の管理であるため、同局以外の人々がその場所を訪れる機会はほとんどなかった。付近の住民も皆体育局関係の住民である。しかし近年は中国の著名な地図サイト「百度地図」にも「日本神社旧址」と表記されるようになっており、エリア内への出入りは比較的自由であるため、今後の変化も見守る必要がある。

注

- (1) 青木祐介「制限図の作成過程とその成立時期について」『日本建築学会計画系論文集』546号、2001、pp.261-267
- (2) 藤原恵洋「明治期制限図の制定経緯と意匠規制に関する考察：制限図様式と創建神社の意匠に関する研究(1)」『デザイン学研究』91号、日本デザイン学会、1992、pp.53-60
- (3) 藤原恵洋「創建神社の意匠特性と復古主義的意匠の創出に関する考察：制限図様式と創建神社の意匠に関する研究(2)」『デザイン学研究』91号、日本デザイン学会、1992、pp.61-68
- (4) 伊東忠太については、丸山茂「伊東忠太と神社建築 明治以降の神社建築に見る国民様式の興亡」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1979、pp.2037-2038（同『日本の建築と思想：伊東忠太小論』同文書院、1996所収）、木子清敬、大江新太郎、角南隆等については、櫻井敏雄「伝統的様式からみた近代の神社——その空間と造形からの視点——」『近代の神社景観：神社局時代に撮影された神社』中央公論美術出版、1998、pp.415-459、藤岡洋保「内務省神社局・神祇院時代の神社建築」『近代の神社景観：神社局時代に撮影された神社』中央公論美術出版、1998、pp.460-484
- (5) 小笠原省三『海外神社史 上巻』海外神社史編纂会、1953。蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社、1994。新田光子『大連神社史——ある海外神社の社会史』おうふう、1997。嵯峨井建『満洲の神社興亡史——日本人の行くところ神社あり』芙蓉書房、1998。菅浩二『日本統治下の海外神社——朝鮮神宮・台湾神社と祭神』弘文堂、2004。青井哲人『植民地神社と帝国日本』吉川弘文館、2005
- (6) 中島三千男『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在——』御茶の水書房、2013
- (7) 国都設計技術専員辦事處『首都計画』1929
- (8) 10010011843 (00) 0124「南京市土地局布告（第一二号）：布告中国童子军司令部征收五台山百步坡民地仰界内各业主呈验契据并定期协议补偿金」（南京市檔案館）
- (9) 10010030094 (00) 0002「函请工务局设计并绘制五台山、香铺营、中山门校舍图样及预算并函复（附计划书）」（南京市檔案館）
- (10) 10020041878 (00) 0001「关于五台山童子军团所属地基及残破建筑物全部发给与正始中学财政局土地局往来文书」（南京市檔案館）
- (11) 西島五一「南京神社の御造営」『日本及日本人』（379）政教社、1939.12。本史料については稲宮康人氏の教示を得た。記して謝意を表す。
- (12) 同上
- (13) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04012565300、本邦神社関係雑件 第五卷（I-2-2-0-2_005）（外務省外交史料館）に1月6日の小笠原の九江出張について、野村外務大臣から小森領事代理に宛てて「當地ニ於テモ神社設立ノ議アルニ付是非共小笠原囑託ヲ立寄ラシメラルル様致度シ 上海、南京、漢口へ轉電セリ」とあり、南京が小笠原の出張先であったことがわかる。
- (14) 小笠原省三『海外神社史 上巻』海外神社史編纂会、1953（2004復刻）、p.273
- (15) JACAR：B15100137300、領事会議関係雑件／議事録 第六卷（M-2-3-0-1_1_006）（外務省外交史料館）

- (16) JACAR: B15100137300 (前掲)
- (17) JACAR: B02032845000、大東亜戦争関係一件／敵国財産管理並權益接收関係／在満支敵国財産管理並權益接收関係 第一卷 (A-7-0-0-9_17_1_001) (外務省外交史料館)
- (18) あるいは、1943 年 1 月の汪兆銘政府参戦後とすべきかも知れないが、上記『管内一般概況』に敵国人 (米国、英国、加奈陀) へ本国引き揚げを迫り、既に大部分は引き揚げたことが報告されている。
- (19) 10020052135 (00) 0003「为南京神社征收土地扩充道路一案与公安局、日本总领事馆与市政府的往来文书」(南京市档案馆)
- (20) 10020040753 (00) 0003「函送日本神社开避道路收用土地专款存储地价报查联和财政局公函」、10020040860 (00) 0044「关于日本神社表参道收用五台山土地孙劭勤应发地价费附请款书与财政局来往文件」(南京市档案馆)
- (21) 10020010808 (00) 0083「关于为日本神社从园林中移植松树等清函致园林管理处陈处长」(南京市档案馆)
- (22) 10020021856 (00) 0043「请配给八月份的食米市神社建设工事一附名单函市府」、10020110071 (00) 0006「配发神社建设工事工作食米」(南京市档案馆)
- (23) JACAR: B15100137300 (前掲)
- (24) 小笠原省三『海外神社史 上巻』(前掲)、p. 273
- (25) 10030030242 (00) 0004「关于日寇征用五台山、左所巷、峨嵋岭等处土地民房及神社建筑房屋范围的情况」(南京市档案馆)
- (26) 10020041635 (00) 0026「关于楮山勇等三人分别申请租用五台山慈悲社二二号等处房屋事与日本领事馆往来文件及附件」(南京市档案馆)
- (27) JACAR: B15100137300 (前掲)
- (28) JACAR: B04012566100、本邦神社関係雑件 第五卷 (I-2-2-0-2_005) (外務省外交史料館)
- (29) JACAR: B15100137300 (前掲)
- (30) 经盛鸿『南京沦陷八年史』社会科学文献出版社、2005
- (31) 同上
- (32) 仲次郎氏所蔵資料 (神奈川大学非文字資料研究センターから図面画像データの提供を受けた。記して謝意を表す。)
- (33) 10030030242 (00) 0006「呈请市政府派员接收五台山所建神社并将其各作市先烈遗物馆及市立图书馆」(南京市档案馆)
- (34) 10030010420 (00) 0009「关于征用五台山基地建筑体育场一案办理情形之文书」(南京市档案馆)
- (35) 10030070323 (00) 0020「为会商办理征收五台山基地建体育场一案请确定会商日期及中国童子军总会复函」(南京市档案馆)
- (36) 李殿君、吴瞳「探访南京仅存二战时期日本神社 现出租给公司办公」中国新闻网、2012. 7. 17 (<http://www.chinanews.com/sh/2012/07-17/4039461.shtml>)
- (37) 王炳毅「日军侵华的罪证南京五台山日本神社」『湖南档案』2002 (11)、pp. 16-17
- (38) 王晓曼、周兆涵、陈宗彪「抗战时期日军在华设建神社初探」2003. 10. 27 (<http://www.china918.net/91805/newxp/ReadNews.asp?NewsID=274&BigClassName=%CC%BD%CB%F7%D1%D0%BE%BF&SmallClassName=2003%C9%CF%BA%A3%A1%A4%B1%A6%C9%BD%C2%DB%CC%B3&SpecialID=7>)
- (39) 于飞「南京古树名木新增 200 多位成员 其一系蒋介石手植」『金陵晚报』2014. 7. 4

参考文献 (註に挙げたもの以外)

- 1 村上重良『国家神道』岩波新書、1970
- 2 阪本是丸『国家神道形成過程の研究』岩波書店、1994
- 3 陈小法《日本侵华战争的精神毒病：“在华神社”真相》浙江工商大学出版社、2015

編集室注：本論は、2016年2月27日神奈川大学横浜キャンパス1号館で開催された2015年度第二回公開研究会「台湾でなぜ神社の復興が見られるのか？ 中国・南京神社の社殿はなぜ壊されなかったのか？」（主催：神奈川大学非文字資料研究センター）での発表を原稿化したものである。